

三重県と聞いて読者は何を連想されようか。津市は、人口約十五万人で、最小の県庁所在都市を、松江や鳥取と争っている。そんな弱小県も、北川・前知事時代には、『三重は燃えている』と、地方自治再活性を全国に先駆けて訴えた。だが名古屋から国道23号線を南下し、四日市を過ぎても、もはや四散する都市は現れない。松坂まで下ってようやく、津を通過してしまったことに気づく初乗りの運転手も多い。今でこそ過疎地域だが、江戸時代には、なかなか高密度の知的活動を誇っていた。その様を实地検証する国際会議が、副題を「グローバルな視点と地域の文化」として、6月12日、津市上浜町の、三重大学三翠ホールで催された。

三重県出身の文化人といえば、内陸の伊賀上野の城下町は、幕府隠密説もある、松尾芭蕉(1644-1694)の生地。伊勢湾岸の松坂には本居宣長(1730-1801)の鈴の屋が、お城の麓に移築されている。数年前、巨大な舟形埴輪が出土したのも、ほど近く。言語学者、谷川士清とも交友のあった宣長はまた、阿闍陀音韻に

「江戸のモノづくり」国際シンポジウムより  
徳川日本の地域の活力と  
海外への眼差し

2688  
1730-1801  
2004 7 31

国際日本文化研究センター  
総合研究大学院大学助教授  
稲賀繁美

も興味を示し、自著『字母仮字用格』の正確さを立証するため、オランダ人に五十音を発音させる実験も試みた。江戸時代後期の海外への関心となれば、鈴鹿より少し南の白子【しろこ】が大黒屋光太夫(1751-1828)の本拠地なら、津市の南、三雲町には、北海道の名付け親、松浦武四郎(1818-1888)の生家がある。ロシアのエカテリーナ女帝に謁見して、当時欧州を知る唯一の日本人、大黒屋光太夫は、蘭学者の大槻玄澤が西暦1795年正月を祝った、新元会、通称「おらんだ正月」にも招かれ、市川崑(津 藤堂藩藩士 1760-1847)描く絵図にも臨席して、お得意のキリル文字を披露している。一方、武四郎は北海道から樺太、千島を踏破し、詳細な地図を作成するとともに、アイヌ文化の擁護に努めた。記念館は平成六年に郷里に開館し、この探検家の偉業を広く伝える。

シカゴ大学人類学教室のフレデリック・スターは、1892年のシカゴ万国博覧会の人類博物館にアイヌ人を「出品」する役を請け負って来日した人物だが、武四郎という先駆者の存在を知

って感銘を受け、その略伝を著述している。武四郎にはまた、全国の神社・仏閣から古材の寄進を受け、それを一疊の茶室に集約した、その名も「一疊敷」が知られる。国際リスト教大学の構内に移築されたこの茶室については、ヘンリー・スミス氏や山口昌男氏(『敗者の精神史』)が、武四郎の特異な蒐集癖に、持ち前の好奇心を同調させて、思い入れたっぷりの文章をものしている。折から北海道立帯広美術館では「武四郎 時代と人々」展がまもなく開催(7.23-8.22)。出品作には、武四郎の死を悼み衆生が集う趣向の、浮世絵最後の奇才、川鍋晚齋による涅槃図も見られる。

【以下次号】

\*なお第5回シンポジウム「文明交流史からみた科学と宗教」は7月11日、京都大学人間・環境学研究所棟地下大講義室B23にて行われた。問い合わせは電話／ファックス075-6753-6718 / E-mail : o51340@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp 第4回講演会では地元参加者の少ないのが残念だった。

思  
考  
の  
隅  
景

文部科学省科学研究費補助金特定領域研究の一環で、三重大学を舞台に開催された「江戸のモノづくり」第4回国際シンポジウム

(6月12日)では、ルーヴァン・カトリック大学のウィリー・ファンデ・ワラ、浙江大学の王宝平両教授が招待講演をなさり、ボン大学のヨーゼフ・クライナー教授が討論を司会された。

一行は、翌日、講演とも密接に結び付いた現地を探訪した。津市の城跡ほど近くには斎藤拙堂(1797-1865)の記念館がある。頼山陽に師事したこの儒者は、大塩平八郎や吉田松陰とも交友があり、月瀬梅林の名を全国に広めた(大室幹雄『月瀬幻影』)。その『月瀬記勝』は戦前の師範学校の漢文の教科書に掲載され、和製漢文のお手本として小中学校教員たちが暗唱した名文。もう少し南の鳥羽藩射和村には、伊勢商人、竹川竹斎(1809-1882)という人物もいて、親類のほか、知人である勝海舟、大久保一翁、辞書で有名なヘボンなどからの寄贈を得て、一万五千冊におよぶ蔵書をなし、幕末期より一般に公開していたことが、知られている。明治の維新になると、竹斎はその蔵書を新設の学校に寄付しようと申し出るが、渡会県はこれを旧代の反故と見なして、売却のうえ現金にて上納せよと命じ、この蔵書はあえなく消滅。「数十年の苦心、一滴の血涙に帰す」との言葉が残る。浅井政弘・上野利三編『竹斎日記稿』(松坂大学地域社会研究所)が編集・発行されている。

そうしたなか、とりわけ興味深いのが、野呂元文(1693-1761)の里。勢和村

徳川日本の地域の活力と海外への眼差し

「江戸のモノづくり」国際シンポジウムより・下

2689  
2004  
8-2

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教授  
稲賀繁美

のふるさと交流館では、6月11日から3日間、特別展が開催され、残された関連書簡の翻刻を含む『野呂元文関係歴史資料目録』(勢和村教育委員会)が頒布された。青木昆陽とともに、将軍吉宗の命をうけ、本草学に先鞭をつけたとされる、本邦蘭学の草分けのひとりだが、その生家が波多瀬村に残っていて、菩提寺に至る里山には、記念館とともに見事な薬草園が管理されている。もっとも吉宗の命による蘭学興隆という物語は、『蘭学事始』の杉田玄白による脚色の疑いも捨て切れず、元文自らが晩年に残した自叙伝には、直接の言及は見られない。とはいえ通称ヨンストンの『動物図譜』翻訳に続き、ドドネウス『阿蘭陀本草和解』を訳出した功績は看過できない。

台風一過の好天に恵まれた野呂元文の里は、四方を山に囲まれ、水田を過ぎる涼風に青々とした稲が緩やかに波打ち、畦道に咲き誇る紫陽花が目にも沁みだす。徳川時代の日本には、隠れ里よろしく、各地の里山に、こうした桃源郷のような空間が開けていた。蘭学艦船の揺籃ともなった山村の風光に接して、地域と地球との接点を探り直した一日の体験だった。

\*なお第5回シンポジウム「文明交流史からみた科学と宗教」は7月11日、京都大学人間・環境学研究科棟地下大講義室B23にて行われた。問い合わせは電話/ファックス075-6753-6718/E-mail: o51340@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp 第4回講演会では地元参加者の少ないのが残念だった。